

チェルノブイリ救援・中部

チェルノブイリ救援・中部(以下、チェル救)が1990年に設立され、今年で25年を迎えた。週3日の活動ながらも、毎年クリスマスカードキャンペーンや南相馬市での放射能測定、ウクライナでのスタディツアー、汚染地の病院・診療所へ医療器材の提供、粉ミルクの供与などを行っている。

今年の大きなニュースとしては、ベラルーシの作家スヴェトラナ・アレクシェーヴィッチさんが、ノーベル文学賞を受賞したことである。日本では馴染みのない作家であるが、チェル救にとってとても大きな存在である。今から12年前、2003年にアレクシェーヴィッチさんを招いて、チェル救が主催となって、全国各地で講演会を開いたのであった。そこでは、放射能汚染の恐ろしさや変わり果てた人々の様子を語り、過去としての出来事ではなく、今なお続く人類にとって大きな問題であると警鐘を鳴らした。また、チェルノブイリでの出来事を物語るだけでなく、日本にある原子力発電所の安全神話についても言及を行っており、東

電福島第一原発事故が起きる前から事故の危険性について予言していたのである。

多くの人々の記憶の中には、あの原発事故はもうすでに終わってしまった出来事であると錯覚してしまう。すでに終わったことではなく、これから様々な面で問題が顕著に出てくるだろう。河田理事は、「事故は終わっていない、ここからが本番である」と語っている。原発事故の後処理には、想像もつかないほどの時間とお金と労力が日本にのしかかってくる。



クリスマスカードを受け取るナロジチ地区のおさやま幼稚園

ドイツやアメリカは、原子力をすでに斜陽産業と位置付け、脱原発に向かっている。しかしながら、未だに日本は原子力を保持し続けている。その理由としては、政治や経済の問題が大きく絡んでいる。我々の組織は、原発について正しい情報を元にして、福島やチェルノブイリの人々と共に問題を解決しようと努めている。スタッフ一同は、支えてくれる人々と共に、この25年精力的に活動を続けている。

(インターン 加藤喜大)